

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

カ

ー

ブ

既に熟知せられてゐる如く、舊約聖書の包含する參拾九卷の書は、キリスト前後に記されたるユダヤ文學の一部に過ぎない。紀元前二世紀にはトーラー（モーゼ五書）と預言書は聖書の價值を有するものと認められ、大體現存の儘の形にて存在して居たけれ共、舊約の第三階段たる所謂「聖文學」の含む範圍は、キリスト以後一世紀迄其最後の決定を見る事が出来なかつた。我等が常に七十人譯（LXX）と稱ふるアレキザンドリヤのユダヤ人の用ひたるギリシャ語譯聖書には、パレスチナのユダヤ人が認めなかつた多くの文書が含まれて居たのである。初代基督者が此のギリシャ語聖書を用ひて居たので多くの教父達は之等文書の價值を承認してゐた。其他ラテン語聖書にも舊約聖經以外の文献が含まれて居たが、ヴァルゲイトを翻譯したゼロームは、ユダヤ人が夫等を聖書と見做さなかつたと言ふ事特に指摘してゐる。従つてユダヤ人の聖經に含まれて居なかつた文献は經外書と稱ばれたのである。

ラテン語聖書に出てゐる之等の文献は幸にして日本語に翻譯さるゝに至つた。先づ大正十一年に「舊約外典」と云ふ題を以て杉浦教授に依つて（但し第二エスドラスを除く）、後に昭和九年「舊約聖書續篇」の題を以て聖公會の委員に依つて譯された（續篇と稱ふる事に依りて本書の聖書の價值が暗示されてゐる）。此の二つの中、杉浦教授の方が折々正確な譯を示すけれども、手に入り易いのは聖公會版である。

要するに之等文献中の或ものは舊約聖書と同等に尊敬を拂はるべきものである。例へば歴史書として第一マツカビ一書は列王記よりも信賴すべきものであり、トビトとユーデットはエステル書より遙かに高尚なる宗教的趣きを有してゐる。又ベンシラの智慧は箴言より一層發展したるもので範圍も亦廣い。併し舊約外典中の一書に、舊約聖書の宗教の最高點を代表し、夫れと同時に新約聖書の宗教に極く近いものがある。其れは所謂ソロモンの智慧である。初代教會は之を外典中最も價值有るものとして喜んで用ひた。我等も亦此例に隨つて今其研究に時間を割く事は意義有ることと思ふ。

二

本書は十九章より成り立つて居るけれども。十章—十九章の後半は、前半と異なりて大概、出埃及記と民數記略の或物語に就て一種の冥想の形式を備へてゐる。或學者は前半と後半の相異を深く感じ、後半は前半と別の著者の筆に依るのであると説明する。私は之れと意見を異にするが、此點に就いては後述する。兎角十章に一定の明白な區分が有るに相異なく、從つて初めに本書の内容を簡単に尋ねる事は當を得た事であらう。

梗概。

前半は之を二つに區分する事が出来る。

一章—五章、智慧有る義人と愚なる惡人との對照
 六章—九章、神聖なる智慧の性質

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

後半、モーゼ時代の歴史に於ける選民を導き給ふ神の御手としての智慧。或ひは義人のイスラエル人と偶像崇拜者のエチプト人との對照、就中之は偶像教に就ての十三章—十五章迄の長い箇處を含む。

尙精しく説明すれば一章に於て著者は劈頭に、彼の根本的興味を示し、正義を愛して神と交るやうに獎勵してゐる。此態度は神聖なる御靈即ち智慧を授かるための唯一の條件である。夫れに反して罪惡と不信は、神と御靈を隔離するのであり、斯る状態は精神的死であり、人間の靈の滅亡である。併し正義と不死は同義語であると言ふ。記者は後に此概念を敷衍するけれども、最初に其れが宣言せられてゐる事は非常に意義深き事である。要するに此は著者の中心思想、正義有るものは不死なる超自然的性質を持つてゐるが、神と正義を輕蔑する者は死の領分に屬すると云ふ事である。

第二章は不正なる者の態度を更に精しく述べてゐる。彼等が身體と物質の生命の外の生命を否み、誕生とは偶然のものであり、死とは全き滅亡を意味するものと言ひ、理性は心臓の鼓動の副産物に過ぎないと主張する。之を大前提として彼等は肉體の快樂に身を委ねるのみならず、能動的に義人に壓迫を加へ迫害する。義人は全きもの、異れる種類に屬する人間である事を本能的に悟り、自然之に對して敵對するからである、彼等は、神は吾が父也と云ふ義人の信仰を嘲弄して、彼を虐待し遂ひに殺し、彼の信仰は空しきものたる事を證明し得たと自負する。

併し假令其身體を虐待するも、其靈には觸るゝ事能はず、従つて義人は全滅せしやうに見えるけれ共、不死のものである故、神の前に平和の状態に置かれるのである。之に反して、不正なる者は此世に對しても來世に對しても望み

を持つてゐない。記者は最も悲劇的な記事を以て、悪人が神の審きの前に起つて其罪を感じ、怖れに満ちてゐる事を序述する。彼等が義人の幸福の状態を見て、彼に就いて下したる前の判斷は誤まつてゐた事を感じ、特に己れの地上に於ける生活は眞の生命ではなかつた事、却つて神と其義より離れ凡ての意義と價值を缺いてゐた事を告白するのである。「我等も亦生れて直ちに又在らず」と云ふ一句は其自覺を示すのである。併し義人は永久に神と居り、彼と共に王となる。

第六章―九章には記者がソロモンを装ふて語つてゐる。之が本書にソロモンの智慧と云ふ標題を與へたと云ふ事は言ふ迄も無い。

他の智慧文學と同様に、記者は智慧を美しき女として人格化して其性質の述べてゐる。彼は彼に相應しい者を求めて汎ねく巡りゆくから、夫れを見出す事は容易である。此智慧を望む者は諸の段階を登つて超自然的生命を受ける爲に導かれ不滅と神との親しき交り、神と共に王と成る状態に至る。彼は人間の中の最大最智なる者たるソロモンが、祈に從つて此の神聖なる智慧を受けた事を指摘してゐる。箴言と同様に、智慧は宇宙の最も價值有るものであると言つて、其れを玉石に擬へるが舊約聖書より一歩進んで、ギリシヤ哲學特にストア派の表現を借りて、智慧に適應させる。即ち智慧の超自然的起原とか、萬有を貫く力とか其純潔性、其運動力等を述べて彼を神の力の息、萬能の榮光よりの一光線と稱ぶ。ヘブル書第一章の記者と同様な表現をクリストに當て嵌める。併し此の序述の最高點はギリシヤの哲學に非ずしてヒブルの宗教である。即ち智慧の主なる特色は彼が人間の靈に宿り彼等を神の友又は其代表者とする事である。

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

又次の（九章に於て）ソロモンの祈にも著者が其根本思想を高調してゐる。即ち人間は身體にも心に於ても幾程全き者であつても、神性なる智慧を受けずんば、彼は空しい者であると言ふ。人間は自分の努力に依つて智慧を受ける事は出来ないで夫れを神が與へねばならないのである。

此處に神の聖靈と稱ぶ、此神聖なる賜物を持たずんば、人間が有限にして有限的性質に壓へられ妨げられるのであるが、聖靈を受けると始めて神の御心を悟る事が出来、否更に斯く爲すところの力を得る事が出来る。而して記者に依ればソロモンばかりでなく、イスラエル歴史に於ける凡ての聖者は、神の御心の悟るべく智慧に導かれて救はれたものであつた。九二八の此一句は本書を前半と後半との経過を示すのである。記者は後半に始めて智慧が歴史に於けるイスラエルを導く神の御手であると指摘する。即ち十章には智慧が、アダム、ノア、アブラハム、ロト、ヤコブ、ヨセフを導き救ふたが、カインと智慧を捨てたる他の惡人は滅びに陥つた事を述べる。又智慧がイスラエルとエジプトより救ひ出し、紅海を渡るやうに助け、荒野にて彼等を導いたと言ふ。併し此點より本書の形式は恰もソロモンの祈の繼續として神の前の冥想となつてゐる。記者はモーゼ時代の物語を省みて、義人たるイスラエル人と偶像崇拜者たるエジプト人に對して夫々神の異なる處置を論ずる。此處にはイスラエルを導き救ひ出してゐる智慧をも早速べてゐないが舊約聖書の物語たる其資料と同様に神自らの活動に凡てを歸してゐる。

此冥想の主題は前半と同じく義人と惡人との運命の對照であるけれども、實例となつてゐるのは唯一の神を崇拜するイスラエル人と偶像を崇拜するエジプト人である。此物語に依つて彼は、神が同一の天然の勢を以てイスラエルを助け、エジプト人を罰し給ふた事を述べてゐる。例へば水はイスラエルの益と成りエジプト人の災禍となつたのであ

る。又此處に「人は己が罪を犯すものにて罰せらるべし」との原則の實例を見る。例へばエヂプト人が彼等が崇拜した獸にて罰せられたのである。併し滅亡せられたものではなかつた。唯悔ひ改める爲に懲しめられたのである。

此處に本題を離れて神の刑罰に關して美しい説を述べてゐる。神が忍耐を以て人間の罪を見逃すのは恐らく彼等が悔ひ改めるであらうと云ふ望みを持ち給ふ事に依る（ローマ二^四の「神のなさけ汝を悔改めに導く」と云ふパウロの言葉を參照）。そして一步進んで彼は神の公平と慈みに就いて感心すべき記事を加へてゐる。神は無論萬能の神であるけれ共彼の無限の力は其正義と愛に従屬してゐる（神は靈を愛し給ふ者と記してゐるが、之は「吾靈を愛するエスよ」の讚美歌の題を暗示したのである）。要するに神は氣儘で、不公平を以て其力を亂用する事は爲されない。斯くの如くにして、神は義人が人間を愛する者と成るべしと云ふ事を我等に教示し給ふと言ふ。神と等しく成り度いと言ふ者は神の如く人を愛して忍耐を以て惡人をも憐れむべしと言つて新約聖書の宗教に近づいてゐる。

此處に「眞の神」と云ふ表現を用ふる事は其逆の偽りの神を聯想させて十三章—十五章の偶像敎の性質と其愚なる事に就いても一つの小説を生じた。凡てのユダヤ人の如く、記者は偶像敎は赦すべからざる罪と見做した如くに見える。天然界の勢力を眺めて、神を知るべき筈であるから、偶像敎は故意に神を知らない事に基いてゐる。此の天然界の美はしく、力有る現象を神化する事は著者に取つて別に驚くべき事でなく、責むべき事でも無いが、人間は斯くする事に依つて天然界を創造し給ふた神を知るべき筈であると主張する。同じくパウロは（ロマ書一^{二〇}）「神の見るべからざる永遠の力と神聖とは創られたるものより見るべければなり」と言つて之によく類似してゐる。

然し人間の手の業の偶像を崇拜する事は全く道理に適はないと言つて、イザヤ書より引用して（四〇—二ハニ〇四四—二

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

一七) 斯る弱き物に祈る事を嘲弄する。之を述べる傍ら、偶像教の起原を論じて、夫れに就いて二つの説を提出する。その一は人は愛する逝ける者の記念として其肖像を作つた事より初まつたが、更にもう一つは遠い國に住む王様を尊敬する爲、其肖像を立てた事に依ると。併し此説を餘り高調してはゐない。寧ろパウロの如く(ロマ書一・二以下参照)偶像教が神を知らない事に基いてゐるから諸の不義と惡弊に至る事を指摘してゐる。

併し眞の神を知る事即ち神と親しく交はる事は正義と不死にまで至る。此處(一五)に本書中最も價值ある一句が出てゐる。「神よ汝を知るは全き正義にして、汝の主權を知るは不死の根元也」と。之を讀めばすぐにヨハネ傳一七三を想ひ出して其類似を深く感ずる。それは「永遠の生命は唯一の眞の神に在す汝と、汝の遺し給ひしイエス・キリストを知るにあり」。隨つて神を知る事は其御心を爲す事により其生命即ち彼の不滅的性質を共にする事に在る。

而して再び偶像と夫れを造る者特に獸を崇拜する者を嘲弄して、イスラエル人とエヂプト人との異なる運命と云ふ本題に歸るのである。此の對照として七つばかり述べてゐるが此部分は冗長にして技巧的に作られてゐるけれども、記者は其宗教的思想の美はしき程度を折々暗示してゐるのである。例へばモーゼが荒野にて變じたる蛇について語る時。「そは之に近すぎたる者は其見し者に依りて救はれたるに非ず、萬物の救ひ主たる汝によりて救はれたる也」(一六七)或ひは又「そは世界は正しき者の爲に戰ふ也」此の原則の諸の實例を述べる。

三

本書の内容に就いては、之を割愛し、それに關して議論を生じた諸の批評的問題を瞥見せん。勿論此の簡單なる講

義に之を徹底的に論ずる事は出来ないが、其中の二つ三つを述べて筆者の有する結論を指摘しやう。

先ず本書の統一性について、換言すれば、後半の十章―十九章までは前半の一章―九章の同一の著者の筆に依るのであるか否か。或學者は二つの相獨立せる著作が技巧的に結合したものであると言ふ。又六章―九章の智慧を讚美する記事と、十三章―十五章の偶像教に關する記事とは獨立なる挿入物也とする批評家もある。此説を有する學者は前半と後半は題材に依つても文體に依つても又教訓に依るも相異なるものであると主張するのである。彼等が言ふ處に依れば、前半の問題は智慧であるが、後半の夫れはエヂプトに於けるイスラエルの體驗であり、前半の文體は簡潔にしてヒブルの對句法の形式を持つてゐるが、後半のそれは冗長であり、前半には神が智慧を通じて働き給ふが、後半には直接に活動し給ふ事、前半には智慧が中心的位置を占めてゐるが、後半には全く述べられて居ない事等であると言ふのである。

以上の異論は或程度まで正當なりと言へるが、夫れ自身で相異なる二人の著者の筆を示す事は出来ないと思はれる。此の諸の相異はやはり唯一人の記者の變つた目的に依ると説明すべきものと思はれる。勿論前半には智慧か神の御靈に就いて良く語るけれ共、智慧は其主題ではない。寧ろ主題は義人と惡人との對照である。其對照はやはり後半の主題であるが、前半に對立するものは神聖な生命を受けた者と夫れを輕蔑する者であり、後半の相手は義人たるイスラエル人と偶像崇拜者のエヂプト人である。前半には記者が自分の思想を述べ、ギリシヤの哲學を以てそれを飾る自由があつたが、後半に其論じ方は或る程度まで後の資料たる聖書物語的であつたのである。同じく文體の相異は變つた題材に従ふものである。即ち前半にヒブル智慧文學を模倣して自然にヒブル詩の形式と簡潔な文體を用ひるが、

「ソロモンの智慧」に就いて

後半に物語を取扱ひ冗長になつて其想像力を逞しうする事が出来る。同じく前半は神が智慧を通じて働き給ふ事を述べる記事を含むと同時に直接働き給ふ記事が見える。又後半は大概神の直接な活動を述べてゐるけれ共神の一特性例へば攝理、智慧、言葉が其代表者になると言ふ記事はないのでは無い。

併し以上の異論に答へるよりも唯一人の記者が兩部を書いたといふ積極的證明を指摘する事が一層有利と思はれる。其一是兩部に同一の言葉と表現が現はれる事、又更に意義有る事と思はるゝ證明は、兩部に同一の思想と教訓の現はれ来る事である。例へば本書は例外的ギリシヤ語、且他の文献には稀にしか出て來ない言葉や、冗言を多く含んでゐる（誤まれるギリシヤ語用語の實例もある）。此用語は一人の記者の文體たる事を明白に示すが、斯る實例は前半にも後半にも有る。

併し尙重要な點は文學上同一の目的と、同様なる中心的思想が兩部に現はれてゐる事、且前に述べた通り兩部の主題が義人と惡人との對照たる事にある（但し前半の實例は天啓的聖書的なものゝ中より引かれてゐるが、後半のそれはモーゼ時代の物語に據つてゐる）。勿論前半は智慧に關する記事を含んでゐるが、それは本題に從屬してゐるものである事は明白である。何となれば記者の持てる興味は智慧の哲學的方面に非ずして、義人に宿り、神の心を知り且斯く爲す力を考へる智慧に有る。同じく後半の偶像敎の記事は本題に從屬してゐる。偶像敎は神を知らざる事より起り諸の不義を生ずるからである。

又兩部の根底をなす事柄は、義人が神と親しく交り、不死不滅なる神の超自然的性質を共にする事であり、其反對に惡人は神より離れて死の領分に屬し望みを缺いてゐると云ふ思想である。又兩部に義人は神を知るが、惡人は盲目

にして故意的に神を知らない事が述べられてゐる。前半にも後半にも記者は神を父と稱んでゐる。何れにも宇宙の勢力は義の爲に戦ふ事が指摘せられてゐる。其他兩部は同一の心の所産である事を示す多くの證明があるけれども今夫れを述べる時が無いのである。

四

原語 次に重大な問題ではないけれ共、本書の原語は何であつたかと言ふ事は興味ある論題となる。大體の學者と同様に私はそれがヘブライ語の翻譯に非ずして元よりギリシヤ語に書かれたものとする。記者は明白にユダヤ人であつたと云へるけれども自らギリシヤ語と其修辭學と、ギリシヤ哲學の慣例の表現に通じてゐた事を示してゐる。多くの場合に其ギリシヤ語の文章は再びヒブル語に翻譯し返す事は不可能である。又其修辭法はギリシヤ語本來のものであり、翻譯の結果として説明する事は出来ない。併し彼が爲す折々の誤謬及び其拙き文體に依つて、彼が生れつきのギリシヤ人でなかつた事は直に分明する。同じく、哲學よりも正義を高調し、イスラエル民族を理想化する事は其ユダヤ人たる事を現はすものである。

年代の問題を決定するのは甚だ困難である。之に就いて多くの學説があるけれども、確實なる證明を有するものではない。本書とパウロのロマ書との多くの類似ある事によつて其は紀元後一世紀の前半に流布されてゐると考へられる(此類似は概ね、ロマ書一章と九章にある。I C Cの五十一頁、二百六十九頁参照)。又其の智慧觀はフアイローのロゴス觀に先立つた様に見えるからフアイロー以前即ち紀元前の末葉に起つたと説明し得る。或學者は年代を尙精

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

しく決定せんとして、二章と三章の義人の迫害に言及してゐる事實を土臺とするが、それは明確でなく、又良く調べて見れば記者の當時の事件よりも、典型的聖書の記事に基いてゐる事がわかる。否それは尙密接に第二マカビー書の記事に類似してゐる。第二マカビー書の年代を紀元前一世紀の前半とすれば、それと本書との關係は以上の第一世紀の末葉の年代を確めるのである。それより精しく年代を決定する事は不可能と思はれる。

五

終りに臨んで本書の教訓に就いて聊か書き加へたいと思ふ。要するに之はギリシヤ哲學の色彩を少しく負びたる最も優秀なるユダヤ教の教訓である。併しそのユダヤ教は根本的なものであつて、ギリシヤ的要素は其形式を成すに過ぎない。例へば記者が不死 *athanasia* と、不滅 *aphasia* との言葉を用ひるとそれに形而上學の意味を與へず、寧ろ神の殊性である一つの性質に就て語つてゐる。併し神の眞髓は其正義であるから、神の義なるが如き義人は同様に神の不死の性質にも與かる。第四福音書はそれを指して「永久の生命」と稱ぶが同じ事柄を言ふてゐる。義人は此世の中に夫れを用ひて末世にも神の前に續いて生きると教へる。

正義と云ふ時、彼は舊約聖書の預言書の理想であつた道德上の卓越を意味する事は云ふまでも無い。其れは説明を俟たないと思つてそれを定義しないが、色々な暗示に依つて、彼の正義觀を繼ぎ合せる事が出来る。例へば不正の者は己れを中心とする物質主義者であり靈的世界の實在を捨て、神と宗教を嘲弄する者である。彼等は神より離れ、行爲に依るも言葉に依るも彼を否む故に、神と同一性を缺き彼等には不滅の生命等微塵も無い。要するに此世に存在し

ても精神的死即ち事實上の死に陥る者である。併し義人は神を見出した者、神を知る者神を父と稱ぶ者である。従つて神と心を同じうし、密接に神と交はり其生命を共にする者であり、記者は一句を以て此思想を一括する（其は後半に出てゐるから兩部を結合する爲、意義ある箇處である）。も早其を引用したのであるが、之は高調すべきものである。即ち「神よ汝を知るは全き正義にして汝の主權を知るは不死の根源也」と言ふ。之に依つて正義を意味する神を知るは神の治め給ふ事を認める事に基いてゐる。イエスの「神の國を受ける事」は同一の意味を以つてゐると思はれる。此の一句を持つて我等は著者の心を理解する事が出来る（不幸にして此一句は聖公會譯に於て、何の誤解に依つてか誤つて「汝に知らるゝ」となつてゐるが、杉浦譯は正確に「汝を知る」と譯してゐる）。さて正義は神の眞髓であるが十一章と十二章に神の正義を含む事を充分に論じてゐる。神は萬能の神であるが、全き公平を以て治め給ふ故に獨斷的に其力を亂用し、罪無き者を罰する與はざるのみならず、力有るもの故に憐みに充ちてゐる（同じくパウロは神の義は其恵みに現はれると教へる）。又「凡ゆる總てのものを愛し給ふ」或ひは「萬物は汝の物なるが故に汝は之を寛恕し給ふ」と云ふのがある。即ち神の目的は悔ひ改めるやう人間を導く事である。此處に於て著者は神を指して「靈を愛し給ふ力の主よ」と呼び其意味を明かにする。併し其終りに「汝は此等の如き業によりて汝の民を教へ給へり、即ち正しき者は人を愛せざるべからずとの事なり」故に神と等しく成る事を意味する正義は、人間を愛する事に基いてゐる事が教へられてゐる。

然るに正義の状態は唯神に倣ふ事に依つて得らるべきでは無い。前半に人間は夫れ自身が神の心を知る事さへも、ましてや其れを爲す事などは爲し得ないと主張する。其可能性は上よりの賜物なる神の御靈を受ける事となる。此の

「ソロモンの智慧」に就いて

御靈に依つて神は天地万物を創り給ふたのである。此の御靈は宇宙を支配し凡ゆる物に生命を與へるけれ共、最も良く人間の心に現はれてゐる。夫れを指して記者は神の御靈、神の聖靈、或ひは力と稱ぶけれども、最も多く「智慧」と稱ぶ。それに依つて智慧文學の論理的發展の最高點を示すのである。箴言は智慧が天地開辟の時、神と共に居ましたものと述べ「エホバは智慧を以て地を定め天を礙へ給へり」と記す。ベンシラは一層此の神の特性を強く人格化して、智慧を天地開辟の時に神を代表者とし、遍在的にして總べての御業に注がれ、特に神の忠實なる民に宿る者と序述してゐる。併し本書の記者は尙一步進んで、殆んど智慧を宇宙に接觸し給ふ神を述べてゐる。第七章に智慧に適應させる形容詞と、彼に歸する活動を述べて、初代教會の三位一體論の表現によく似てゐる。此の類似は偶然的のものではない。何となれば教父夫れ自身が、本書を一つの資料として用ひてゐるからである。随つて夫れは基督教の三位一體論の發展の意義ある段階を示すものである。

併し彼等に何れ程の興味を與へるとも、記者は智慧の理論的方面に力點を置いてゐるのではなく寧ろ智慧が人間の靈に宿る事を高調してゐる。そして彼は人々を「神の友又預言者」となしてゐる。

此の生命を與へる御靈は人間に與へられた神の賜物たるのみならず神は其れを降す事を切に望み給ふと教へる。箴言と同様に智慧は汎く巡りて「彼に相應しき者を求める」と序述されてゐる。此の「彼に相應しき事」は一種の態度であり、それは輕蔑的不眞面目なる人間の態度の正反對の態度である。斯る不眞面目な人間は「死に相應しい」と言ふてゐる。要するに御靈の宿る條件は人の其れを受ける爲の志望に依るのみである。一箇處に（六—キ—）記者は不滅的生命の諸の段階を説明する。此處に *Sortes* と言ふギリシヤの修辭法を用ひてゐる。それは議論の連鎖であり、

一結論は次の前提となつて最初の前提は最後の結論に至る型である。「智慧の眞の始めは修養を願ひ求むる事にして修養を求むれば智慧を愛する事となり、智慧を愛すれば其律法を守る事なり、其律法に留意せば、不滅を保證せらるゝなり、不滅は神に近ずかしむ『神に近ずく者は國を受くる也』故に、智慧を願ひ求むるは王たる事に至る」此の表現は一一細密な研究を要するけれ共此處には二、三の點を指摘して止まん。

最も深き意味は第一步にある。「修養」(直譯は「子供の養育」)を願ひ求むる事、之は子供の如く謙遜な態度、即ち己の缺乏を感じ教へられる願望である。イエスも其れを指して神の國に入る爲の缺くべからざる條件として幼兒の精神を擧げ給ふた事と同一である。之は智慧を愛する事を生じ、それに依つて人は自發的に(エレミヤの心に記される律法の如く)彼の律法を守る(或ひはヨハネ傳一四^{一五}「汝等若し我を愛せば我が誠めを守らん」を參照せよ)。其結果は「不滅を保證」せられる事と稱ばれてゐる。即ち人は神の心を爲せば爲す程時間と境遇を超越せる神との同一性を感じる。使徒パウロは此の確信を指して「御靈に依る保證」又は來らんとする命令の初めの實と稱したのである。次は記者が不死不滅に附したる意味に就て最も明かな序述である。「不滅は神に近ずかしむ」は神と親しく交はる事と其性質を共にする事を意味する。斯る人間の爲に、神と共に生き神と共に王となるべき將來は備へられてゐる。之は此意味深い箇處の最高點である。

記者に依つて、不死即ち神との同一性は、時間を超越するが、彼も又來世の命を期待してゐる。「されど義人は永久に生きる」又「神に信賴する者は眞を悟り、忠實なる者は愛を以て神と共に住まん」

約言すれば、著者の救濟觀は神が謙遜と信仰に依つて彼を求める者に與へる超自然的生命である。之は本質的にバ

「ソロモンの智慧」に就いて

「ソロモンの智慧」に就いて

ウロ及びヨハネの宗教である。但し一の事を缺いてゐる。本書の著者は無論「限り無き生命は汝を知るに有り」と言ひ得るが、ヨハネは「又汝の遣はし給ひしイエスキリストを知る」と加へた。又パウロは、は神の力神の智慧たるキリストを述べ傳へてゐる。本書の記者は神が其御子キリストを遣はし給ふた時代以前のものであつたけれども、それにも不拘此書は其精神に充ちてゐたものであると我等一同認む可きである。

(註) 1 Gregg in Cambridge Bible (最も良く記者の精神を傳ふるもの)

2 Goodrick: The Book of Wisdom (徹底的ではあるが、場合に依つて同情を缺いてゐる)

3 Holmes in Charles vol I.

4 Heinisch: Das Buch der Weisheit

5 Feldman: Das Buch der Weisheit

6 Porter, American Journal of Theology 1908 pp 85 ff (根本的教訓を上手に述べてゐる)

7 ヌアロとソロモンの智慧の關係に就いて I. C. C. Romans, pp 51~267